

33 精子不動態抗体による不妊症の疾患感受性遺伝子の検討 HLA-DRB1*0901遺伝子の関与について

兵庫医大

満尾 瑞、辻 芳之、阪田 和子、内藤子来、香山 浩二

【目的】女性が男性精子に対する抗体をもち、そのために妊娠が著しく障害される不妊症があり、他に異常の無い不妊症の約15%がこの原因で占められている。患者血中の抗精子抗体のなかでも補体存在下での精子細胞障害能を有する精子不動態抗体が検出される症例が不妊症をもっとも強く発症する。女性側に精子に対して備わっているtoleranceの何らかの破綻がこの精子不動態抗体の産生を誘導し、自己免疫疾患と同等の発症メカニズムがあると想定した。そこで、多くの自己免疫疾患がHLA遺伝子に拘束性を持っていることから、もっとも多型性に富むHLA-DRB1について患者の遺伝子型を検討した。

【方法】精子不動態抗体が確認された不妊症女性患者30名について、末梢血から採取したDNAをもちいてSSOP法によりHLA-DRB1遺伝子型のタイピングを行った。対照は正常人493人について同等のタイピングを行ったものを用いた。

【成績】精子不動態抗体をもつ不妊症患者は、DRB1*0901遺伝子以外いずれのDRB1遺伝子の頻度にも対照群と全く差が見られなかった。しかし、DRB1*0901の遺伝子頻度は24.1%と対照群13.1%の倍近くあり、統計的処理にても、 $\chi^2=4.88$, $p<0.028$ と明らかに有意であった。

【結論】精子不動態抗体が原因の不妊症において、HLA-DRB1が疾患感受性遺伝子である可能性があり、自己免疫疾患と同様のメカニズムがこの不妊症を惹起していると考えられる。更に、DRB1と連鎖があると言われるHLA-DQA1,DQB1について、現在検討中である。

34 反復流産患者における流産の心理的影響とこれに関与する心理社会因子

名古屋市大、同精神科*、国立精神・神経センター**

青木耕治、小笠原真弓、生方美恵子、松下美恵、古川壽亮*、堀土郎*、川西陽子*、北村俊則**

【目的】器質的異常を否定された反復流産患者が拳児に至るか否かについては心理社会的因子の関与も想定されるので、我々は2回の反復自然流産を経験した夫婦において第3回妊娠に影響する心理社会因子の前方視的研究を開始した。【方法】2回の自然流産を経験した夫婦に対して、告知同意を得て、心理社会的および精神医学的因子を調査する半構造化面接を第3回妊娠前、第3回妊娠直後、および流産または出産の3ヶ月後に行なう。【成績】29組の夫婦において第1回調査面接を終了した。今回は第1報として第1回、第2回流産の心理的影響とこれに関与する心理社会因子をステップワイズ重回帰分析により検討した。第1回流産の妻に対する心理的影響は、結婚前の交際期間が長いほど ($\beta=-0.58$, $P<0.001$)、妊娠した時に流産するのではないかという心配を持っていないほど ($\beta=0.48$, $P<0.001$)、流産後に手伝ってくれた人が少ないほど ($\beta=0.28$, $P=0.005$)、言動で妻の気分を害した人が少ないほど ($\beta=0.29$, $P=0.001$)、家賃のいる人ほど ($\beta=-0.26$, $P=0.003$)、マイナスの影響が大きかった (Adjusted $R^2=0.93$)。第2回流産については、青年期に出産は重要なことだと考えていた人ほど ($\beta=-0.54$, $P=0.003$)、青年期に職業について思い悩まなかった人ほど ($\beta=0.43$, $P=0.015$)、マイナスの影響が大きかった (Adjusted $R^2=0.38$)。また、第1回流産のマイナスの影響が少ない人ほど、第2回妊娠時の在胎週数が長くなっていた ($r=0.41$, $P=0.03$)。【結論】流産の影響度には種々の心理社会因子が関与していること、さらにこの心理的な影響度が次回妊娠時の在胎週数へ関与していたことから、反復流産における psycho-neuro-immuno-endocrine networkが示唆された。